藤袴

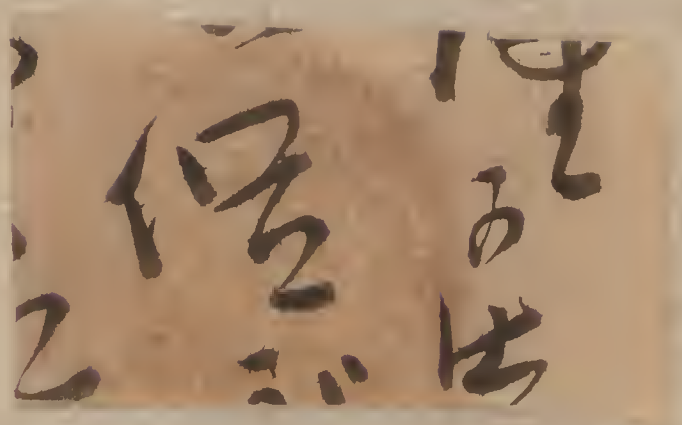
三拾

30

△藤袴十七 卅

玉鬘之并八巳上之并也、

玉抄云以詞并歌為巻名 但詞ニハランノ花トアリ 源氏三十七八月九月ノ事アリ
行幸ニ二月ニテノ事アリ三月ヨリ七月ニテ五月ノ間物語ニ不見 此間ニ定テ玉鬘ノ
内侍ノ督ニ被参事 夕霧ノ中将ニテ宰相ヲ兼タマヘル事 大宮ノセイ ノ事有ヘシ、



内侍ノカミニ玉カツラノ事ハ里家ナガラ尚侍ニ住セラレテ後ニ入内アリトスタリ
家ヨリ玉ノ心ヲ寺し源モ内フモ内侍ノ督ニ成テノ宮仕ヲス、メ給ヲイカバハセンノんし

源ハオヤト思人ナレモ
好色ノアルハウチトケ
ガタキトナリ

心ヨリ外ハ自然天子
ノ御好色アラバトし

何方ニモ 源ニモ内フ
ニモ深ク思ハルトし
ホドモナクカサキャハ
イ中ニテ生タル一シ
源内フノ深ク思石ニ
コキデン中宮ナレドモ
外ニモアシク思ハレバ
ヲタヤスク人ワラヘ
ナランスし

玉モ廿四歳ナレ初思ヒ
シルニジキニモアラヌ
トナリ

△内侍乃かミの侍従ハ人乃事被申よろしくそうの
うちにも心にあらん歎と思ひきこゆる人乃御ん
ざうちとくまじき世なわかくれバましてさやうの
しらひ心つきてんよわかよぶんなる事もあら
ば中宮女御もかろく心得きてんまぬ事もあるべし
たなうむね我身ハよくりのなくハまみえていはゞ
うこゝろもぬるくおりひとしめるゝあまきかどもなく
わきゝおぼしめておりひひらぬうで人まろへなる
きゐよゑんまなさむとうけひ給人ことも初何くとかく
心つきてはかりうぬ事乃ことぬ御事を聞覚し
志はまじき維にあるまじくはまくぐに給ゑかし兄

たゞ人にてはたゞ物なげかしさわとてうちとけにくきほどにはまよ
あしきことはなけれどこの殿の御心ばへの
むつかしく心づきなきもいかなるついでにかは
もてはなれ給て人のおしはかるべかめるすぢを心
きよくもありはつべきまことのちゝおとゞもこの殿の
おぼさん所をはゞかり給てうけばりてとりはなち
けざやぎ給ふべき事にもあらねばなをとてもかく
ても見ぐるしうかけ〳〵しき御ありさまにて心をなや
まし人にもてさはがるべき身なめりと中〳〵此
おやたづねきこえ給てはことにはゞかり給ふ気色もなき
おとゞの君の御もてなしをとりくはへつゝ人

しれずなんなげかしかりける思ふことをまほならず
ともかたはしにてもうちかすめつべき女親もおはせず
いづ方もいづ方もいとはづかしげにいとうるはしき
御さまどもにはなにごとをかはさ
なんかくなんともきこえわき給はん世の人にゝぬ
身のありさまをうちながめつゝ夕暮の空のあはれげなる気色を
はしちかうて見出し給へるさまいとをかし
うすきにびいろの御ぞなつかしきほどにやつれて例に
かはりたる色あひにしもかたちはいとはなやかにもて
はやされておはするを御前なる人々はうちゑみて見
奉るに宰相の中将おなじ色のいますこしこまやかなる

ユイニキ巻傳服者ハ冠ノカザリシノノク丸ユイシ巻也
タキリハ別テ衣アイタメニヘル丸ん名ヲフクノメニフナリ
ユイル将サ上ヘ巻
テハシル松クシテ
冑フクノすハ下ヘ巻也

なるをしすかさまもえいま記給へる姿しもまた
いとなまめかしうきよらにておはしたりはしめ
より物まめやかにこゝろよせきこえ給へはもてはなれ
てうと\/しきさまにはもてなし給はさりしならひ
なれはいまあらさりけりとてこよなくかはらんも
うたてあるへけれはなほみすに木丁そへたる御たいめん
は人つてならてありけり大臣の御せうそこにて内
よりおほせことあるさまやかてこの君うけ給はり給へる
なりけり御かへりおほとかなるものからいとめや
すくきこえなし給ふけはひのらう\/しくなつかしきに
つけてもかの野分のあしたの御かほは心にかゝり

源玉ノ中也ト宮仕ヘ有
示アリツル方宮仕ニ
出シテモ好色ニテ必
むかしゝ事セント
むつかしき事トし

ウヘノ——空コトヲ
作テタキリノタメニ
フト云ヒニキナリ
内ノ玉ノコトヲ申テ

てこひしきをうたてあるすちに思ひしをきゝあきらめて
のちはなほもあらぬこゝちそひてこの宮つかへをおほ
かたにしもおもひはなち給はしかしさはかり見所
あるおほんあはひともにてをかしきさまなることのわつら
はしきはたかならす出きなんかしと思ふにたゝなら
すむねふたかるこゝちすれとつれなくすくよかにて
人にきかすましとはへりつることをきこえさせんにいかゝ
はへるへきとけしきたてはちかくさふらふ人もすこし
しりそきつゝ御木丁のうしろなとにそはみあへり
そらせうそこをつき\/しくとりつゝけてこまや
かにきこえ給ふうへの御けしきのたゝならぬすちをさる

廿八日八月之大宮ノ
逝去ハ三月廿日ナレバ
タリ卅日ノヲツモリ八月廿日五ヶ月ニ当ル之也バ
此月ハ御ブクヲヌガセ給ト云し
廿日迄ノ服トアルニ
十三日ノ解除イカゞ
法梓ニ云之ハ日ヨロシカラザルニアメリテ廿日比日ガラ
ツヾキテ悪日ナレバ十三日ヘ取コヘテカワラヘ出解除トナリ
十三日ニト源ノ乂
ミラトし

さる御心し給へなどやうのすぢなめりいらへ給
はむ事もなくてうちなげき給へる程しのびやかに
うつくしういとなつかしきに猶えしのぶまじく御
ふくもこの月はぬがせ給ふべきを日ついでなん
よろしからざりける十三日にかはらへいでさせ給ふ
べきよしの給はせつるなにがしも御供にさぶらふ
べくなん思ひ給ふるときこえ給へばたぐひ給はむも
ことごとしきやうにや侍らんしのびやかにてこそ
よく侍らめとの給ふこの御ぶくなんどのくはしき
さまを人にあまねくしらせじとおもむけ
給へるけしきいとらうあり中将ももらさじとつゝ

露ヲダニ今ハカタミノ
藤衣アダニモ袖ヲ
フクノ嵐哉
サデモアヤシウモテノ
ハナレヌトハ事ト見
オト思タレバ夫ハ違ヒ
タルニ又他人カト思ヘバ
服衣ハ同ジ事ナレバ
ん乃がタキニヤトし
アラハシ衣 色服ナ
ソハ内ワ服何トモ
不知シテアランニト
夕自ノ一知タニハチハ
むしトし

ませ給ふらんこそ心うけれしのびがたく思ひ給へ
らるゝかたみなればぬぎすて侍らむこともいと物うく
侍る物をさてもあやしうもてはなれぬ事の
又心えがたきにこそ侍れこの御あらはし衣乃色
なくはえこそ思ひ給へわくまじかりけれとの給へば
何事も思ひわかぬ心にはましてともかくも思ふ
給へたどられ侍らねどかゝる色こそあやしく物
哀なるわざに侍りけれとて例よりもしめりたる御
気色いとらうたげにをかしかゝるついでにとや
思ひよりけんらにの花のいと面白きを持給へり
けるをみすのつまよりさし入て是も御覧ずべき

ラニノ花 蘭ノ花也
紫蘭ハ是也 青懐
源氏ハラニトアルナリ
拾遺 思草ニ云ハニヒラハニヒトナヲシミラニヲシラニラニヲラニナヲサレタリラニノ花ヲメキリ
モナテテ井タニヘルヲミスノスソヨリサシ入テ付花モ可ヲイウレモアレバ可覧アレトテ遠モ
手バナサデ持テ井玉ヘ
モトニハユヘハアリケリ
トハ春ハ蘭夏ハ萱ナド名ノカハルヲ蘭見萱忘ナド用テ兄弟ノ一ニ云ナラハシタリ
春ノヲバラントス夏ノヲバケイト云ランニモ紫ノゆかりト云んニや

ウツタヘニ 一向ト云ん也
ヒクスラフト云モ同意也
河云 ウチツケト云ん也
ヤガテト云ムト同也

藤ガカコテハ哀ニテハ哀衣ノ心也
同此ハ玉夕同様ノん
カゴトハサノ也

東路ノ道ノハテナル
ヒタチ帯ノカゴトハカリモ
アハントゾ思フ
道武曰金帯鈎トヲ
玉ノ帯ノカガヒヲ金ノ
鈎ニテスル帯カゴト、
ハフヽクル也

タキリト玉ヲ能ヲ尋ミバ
兄弟ニテハナソトナリ
サレバハルケキ也(トヨ
メリウス紫ホトハ実ハ
イトコナレバツハカリノ
ユカリト云んニヨメリ
武サシ也ノ袖ヒツガリ
ムシカドワカムラサキハ
尋ワビニキ 同シ也ト思シカドモ
サカゴトソトシタルカコト苦ハアレト

ゆへハありけりとてとみにもゆるさでもたまへれは
うつたへに思ひもよらでとり給ふ御袖をひきうこ
かしたり
おなし野の露にやつるゝふちはかまあはれは
かけよかことはかりも みちのはてなるとかやいと
心つきなくうたて成ぬれとみしらぬさまにやをら
ひきいりて
たづぬるにはるけきのべの露ならば
うすむらさきやかことならまし かやうにてきこゆるより
ふかきゆへはいかゞとの給へばすこしうちわらひて
あさきもふかきもおぼしわくかたは侍なんと思ふ

給ふるをまめやかにはいとかたしけなきすぢを思ひ
しりなからえしづめ侍らぬ心の中をいかでかしろし
めさるべきなかなかおぼしうとまんがわびし
さにいみじくこめ侍るを今はたおなじと思ひ給へ
わびてなん頭中将のけしきは御覧じしりきや人の
うへになど思ひ侍りけん身にてこそいとをこがまし
くかつは思ひ給へしられけれ彼君は思ひ
さましてつゐに御あたりはなるまじきたのみに
思ひなぐさめたるけしきなど見侍るもいとうら
やましくねたきにあはれとだにおぼしおけよなど
聞えしらせ給ことゞもおほかれどかたはらいた

俵レバ今ハタオナシ
ニハナルカラツクシテモ
アハントゾ思フ
ワケヤ上ハカラウ
クシテモトヽ也
頭中ハ柏木也実ノ兄
オトシラズシテケシキ
ゾ也 今ハ我カカノ
上ニ為テヲコガマシク
ナトナリ頭中将ハ今
好色ノ思ハサメテ玉
ノ御アタリハナレズ
ナレタニハント思ヘバ
ラヤマシキト也頭中
ノ身ノ上ノ外ニ為ル名ト
タキリノ詞也

くれなゐのうすぬなかんの恵やうくにほひわたる
むつましとおぼしたまへんうおほ御覧じてのみあや
まちも事なく来ん乃程ハなのはちうらんじまつる
はるやうを待らん程哉とて蛍はさててよいは
まうしもかくさはかりけましてなゆやかましく
なんとてへたて竹ぬ遣ざるいるくうちなけきて
たち給ぬなのしくふもうちいでてくやふられとくち
おしまよつきてもうれとすこし力ましそおぼへ
しはけりひとかたおほいわれの御ここしみくもはきのうちを
ざふりのおもんつ事て女ほうんと思いのうし思ひ
はかれまんへみはいりわたまのんまはせ給ひ御わうを待ち

などやのえ給さめの家はうへを志ふくめさすおりひ
竹へもみやなと乃まんしとまへふひとまそいゐき
んふかきまきをはくしいひなやまし給りけん御わ
給ふらんとおりふにねんとはしきされと大原
野のり幸ありうへを見まゐらせていとめでたく
おりしるわと思ふ竹への宮まうこさ人いかのうつふと
見んまゐてえしとふやはうひのすちもてなされし
さ思ひてなんしけるすくりのきしあと乃竹へは
さても人さはいりうさにつきてうはたくひて御
しおらん中宮よくなしひおまうすちまて、おりし
ましまのこ来てん原んきとなくおほさまとまて

まれしらへはいとしき情思ひわかともちとかなしひ
たまふことりくさう侍らめ言ハいとまんなりけ
あはれしたなりきわざとさうすちの情らやつりん
いもあらぬまれりしひまくへのうむさなりけれ
んなまよなりんもさる御なしひめていとく
れしくなんきてなふるとおもしうやなかし
やわが心ひよなる人のうへにてもあらぬ我大将
さへやまをこうむなまめかしすべてかくるさきとのん
くるしさ我すくさておやまひとのうらみおふ
りへまていうるくしきわざなれきかはす
恵の筋りしひ過しつのわすまさしりうば

んかたの山里小なときこしをかれおほとかりくさ
入給へくもあるをとうれへしにいとおもしくそのく
わすりめたるなれ宴よりく物めりれとてうれ
おとこをひとめおいおあめわかつまくしも
の給ひなれ人かうはこやの御人すそいとよかふ
をしはまあめりうしとな御めおよさるさなりしてきを
かようしこくあやまちをまくなとしておりひい
めやはあらんさそ文書ほうん小もいまよくたらひ
たらんのしかうちよくらうくしき物の相ほやけ
事はおほめすしのはるるくしてうへの
清まよ給へり務給御んなりいたりかまし侯なと

ヒゲ黒ノ内ヘ玉ノイヲ云入後ニ源ノ好色アル心ヲ推量叶ト内ノタモフトし

のちぎしまでのさまかしこれは年ごろよくてしく
まことにえならぬ御心ざしとのがれよき人は
やしなはれたるもさやうになんおもむきて
大方のはなたる事のたよりのあり気色はみえたる所
にもいろいろへかたち所とやすき折ふしにもうちまかせて
かさいとかけなきまうされかたやはる人をなきは
すなもはんゆるしてかくなんとおぼされ世はま

女ハ三ニシタガフ 從礼云 婦人ハ有三從之義 無專用之道 故ハ未嫁トキハ從父 既ニ嫁ハ從夫 夫死從子 故ニ父者子ノ天し 夫ハ妻ノ天し 三從ノ義ナラバ源ヒハ娘ノ父ナレ圧又実父ハ内府次オト云フ ンし花ノ従ハアヤニリ 十リ ワイテハ次オニ実父ノ内フシ次オニスベキシツヤ(ねんごろに似せ)ハアルニジキートし ヲノが心源詞し玉ノ人ト花ニ云ハアヤニリニヤ ウチナし八内府ノ内ニハ テノタニラヲ次花し

あやしき妻女は三ちゑさりあはれにあう
おなまうけてありへなめりんよまあきんすい
あるまじきことなわとの給ちらくかもやむごと
をよそれとしくをへてのし折へたえ給の

紫花明ノ

オホザウノ宮ワカヘーし 玉ヲステゲテニ内フヘユワリテメイテイノ多仕ニヨシキテト思源ノ心サシむカシコノカドアル人ナルトヨロコビヤサルトハアザケリノヨロコビハラウロウトハ字ノ字ノ寸ハ獣物ヲコメラノ心いれノ字ノ寸ハ鳥ヲコメタリ心ハ玉ヲコメヲカニトノ源ノ心ハ内フ近ニノタモヘルコシラヅメル人ニヤメリメルトタキリノ源ヘノタニフし

すぢの人かずとかは猶さしはなちすてうきてうにかく
ゆづかつきを大うの宮はへのすぢありらう給ふ
ぎんとおもはるゝおもしろくうとおぼす
なかれゝなんよ給ふひやさされぬ所とふしうゐ人
かくわやけしなわとにやうはりしさ所ようる
や折へはけなさは思ひ給へんりしと相済するといと
おしくそいと所がくしきすぢよも思ひよね
なまひろるかいさわふうきさはんあらひあるんかし
とをのはるいりさにつきてもあるいなるす
あわなんおりひくあり風とわらひ給御気色
けざやかなまゐらせ給はお相すふみかでもそうわや

二カく 曲ーー

思ヒグニハ思カイナシし

宮仕ニ玉ヲ出シテ祈ク 源ヲ里ニシテノ給ハ[illegible] ニギレガマシキ[illegible] 思召ラシト内ノ心ヲカシ コノキスイ[illegible] トヲソロシク思召し

八月ハ服ヌキ給フニテ 九月ハ内ノイムル月 ナレバ十月トし

六帖 手ヲ分ヘテヨシ ノヽタキハセキヌ共人ノ 心ハイカヾトソ思フ

みな人のおしなへたる宮つかへの事をおもひまし
りはいとくちをしくもちけなうまつりもこそに
いかてかくれたる義をまつりせまほしかる相は
すみやかにおほみやはひ乃すかたりてけさ庵のある
ましくまうきたるわ湯をとりしきて後おりひよわ
なにはのあれとむくつきくおりさまかくて御ふく
なとぬき給ひて月たゝは猶まいり給はんこといみ
あるへし十月はかりにと覚しの給ふをうちにも
心もとなくきこしめし聞ゆる人々はたれもたれも
いと口をしくてこの御まいりのさきにと心よせのよす
かよすかにせめわひ給へとよしのゝ瀧

をせかんよりもかたき事なれはいとわりなしとおの
おのいらふ中将もなかなかなる事をうち出て
いかにおほすらむとくるしきまゝにかけりあり
きていとねんころに大かたの御うしろみをおもひ
あつかひたるさまにてついせうしありき給ふ
たはやすくかろらかにうち出て聞えかゝり給は
すめやすくもてしつめ給へりまことのはらからの
君達はえよりこす宮仕への程の御うしろみ
をとおのおの心もとなくそ思ひける頭中将心を
つくしわひし事はかきたえにたるをうちつけ
なりける御心かなと人々はおかしかるに殿乃御つかひ

まそおりしたる折もそいそは思ひやかなる御せう
うこなども心もとなかりし給ろくれは月乃あかき夜
あつまのすけありけるまそりのし所へまゐりきて
入べくもあらざりしをなおなくされみのみまとの
まへみすまくはうしやえ所りんしといしも
なほはくましけれども宰相の君しそいるへききこえ
給なまりしをえらひてまゐる所へかはつれ人はてなうぬ
御きうえこありあう給うめうくものとをくては
いうしまきえはまへつうむ男はうこゝうは小も
給ら給かぬたとひも給なるいひのありうや
あさいの事なまどたのりしまず思ひ所へ分ふ

とてあれし思ひ所へまゐりてふ葬いぬ乃はりわを
とりふくて我こえまかりしけれども日ゝ絵おやりしく
なやましう給まだおきおかりなどもえしならで
なんのくますでとかく免給も中くうとりしきさ
ん蛇なんしはる為とのとものあたちてもえ出し
所へまなやましく物はさぶらん供来ての申となり
ゆるさうを給ましくやうしくなる事こえさせるを
んちあうわかとてかとく乃はせうるとも思ひ
届ふにやまさ給りきなど人のはをとおおりもといかう
めやすしはりわ給りんほどのわかのくりしきさは
もえたりぬ我うたくありの給りんなんなんよかうん

何事も人めはゞかりてえまいりこずやうのしぬ
事なん中〳〵いぶせくおぼしたるなかる
かゝるなき御ついでにいでやをこがましきことも
えぞきこえさせぬやいづかたにつけても先なれ
御覧じすぐすべくやはありけるいよ〳〵う
らめしさもそひ侍るかなまづは今宵などの御もて
なしよきたおもてだつかたにめしいれて君達こそ
めざましくもおぼさめしもづかへの人などやうの人々
とだにかたらはゞやまたかゝるやうはあらじ
かしさま〴〵にめづらしき世なりかしとうちかた
ぶきつゝうらみつゞけたるもをかしければかくなんと

げにおぼえなき人きゝてうちつけなるやうにやとはゞ
かり侍るほどに年ごろのむもれいたさをもあきら
め侍らぬは中〳〵なる事おほくなんとたゞ
すくよかにきこえなし給ふよまのほどゆくてなるか
すこしあかね
いもせ山ふかき道をばたづねずてをだえの
橋にふみまよひけるよとうらむるも人やりならず
まどひけるをばしらでいもせ山たど〳〵しく
しぞたれもふみみしいづかたのゆゑとなんえ
おぼしわかざめりし何事もわりなきまで大方の
世をばゞかりめればえきこえさせ給はぬになん

イモセ山兄ヲノ了し
下ニ妹兄トヲリ
イモウトセウト云了
心躰キコシモネヲテ
前ニケサウ立タルトし
ツダヘノ橋ハ文ニヨヒタル
ムニヨリ　ムツマシキ
イモセノ山ノ中ニダニヘ
ダツル雲ノハスモアルハ

何方ノ故　已ニ物ノ詞ト
アリ　イカド玉ノ宰ノヲ
宰ヤ待テカドキテ
宰ノ詞　玉ハ何方ト
ノ思ヒワケモナノコヲ
何ヲモハドカリテ玉
ニエヤキコヘタヽ
ハヌトナリ

古今 住吉トアニハ
云モナガ井スナ人ワス
レ草オフトヱナリ

ヤウ〳〵
カシコニ なムイテヽ
ヤウ〳〵 骨ヲモウミテ
コソハ なムダテシモ
セメトテ 柏立 給ヘ
又ヤウ〳〵 骨ウミテコ
ソウラミモセメトテ
トシ 格勤トヲ
ヤゴトヽムイかモアリ

なのはじめかくのごとも侍らしときこゆるはもさる
す なまはよしなのめしねらんとすさましき
などあはれうくらうはかりわてあうはかなくもあなるも
とそたちたまふ月くさあくさしはうわてさうし此
くしまもえんなるりいとあて座まふきまけある
うきちして御みやのすうさ侍めまいりけれ
やうすそいとれう宰相中将のけしひあわ
さまはえなるびはにこれもおりしりめぶいに
いめでうく御なうひ成りんとやの歩人さ
例のさあましさことさもとりたてめであへまえ

大将 蛍黒ハ此中将ハ
柏木ハ 男君ニ中将ヲ
以ト申サ成 数寄モ柏モ
右ノ宮可成

大将ハこれ 中将ハおあし右のとをなれはつまり

父内フヘモ玉ヲ許ヘ
ヤリタミヘトト給トシ

よひとりはらうんざはようさしひおとゞゆるやす
はき給きわ人かうもいとよくおほやけ此御うし
給ふ此ゆうなるべきおぼしたまさなるをおとゞは
あり世とおほしなかうこの此おとゞのかくきゝ給へ給
事成いうゞいききこえりへすべうらんさるやう
あ御あとにようとおう給え給へ子すちさへはまえ
まおのを成さえ給へまうこれ大将ハ弘徽殿の女御の御
いうくうみなおりしりふおとゞたち成をおきまて
さしつまの清おぼえいと座んおとゞあまおはしと
廿二三のほどにものし給ふみの才は窓よのあまう
りゆ秋れ乃兄や乃院おかいきゝりの年乃程に侍

年ヒゲニ三四ヤナトヘ
カタチモアシハアラ
ヌトナリ

蛍ヘ玉ヲ二ボト
朱雀院ノコキデンノ女ゴノ兄ナリ
嫡女方二ノ姉妃ナトシ

嫗トサシヽ老女ノ一人ヽ
清少納言ニモ云嫗ノ
ケサウ白トアルモ同
老女ト云事ヽ

よはひかこのかみはことなるかたわにもあらぬを人
からやいかゝおはしましけんおうなとつけて
心にもいれすいかてそむきなんと思へりそのすちに
よりて六条のおとゝは大将の御事はにけなくいと
ほしからんと覚しためりいろめかしくうち
みたれたる所なきさまなからいみしくそ心を
つくしありき給ひけるかのおとゝももてはなれても
おほしたらさなり女は宮つかへをものうけにおほ
いたなりとうち〳〵のけしきもさるくはしき
たよりしあれはもりきゝてたゝおほとのゝおも
むけのことなるにこそはあなれまことのおやの

弁ノオモト 玉ノ女房
ヒゲクロノ中立 執持人

初霜ノ旦 玉ヘケサウ
スル人〻ノ中立ノ所ノ文
モテ参ルトヽ

九月ハイム月ナレバハ
月ノ内ニアフ事モヤト
タノムセヒモナシト也
トヽ

五月九月ハイム月ナサ
レド数ナラヌ身ハイトワ
ヌトヽ十月ハ入内ト
定リタレバ九月ニ命ヲ
カケテ思フハカナキトヽ

古人今サヽノハニヲク霜
ヨリモ独ヌル我衣ゾ
サエニサリケル
玉ザヽノ葉分ニヲケルシラ
露ノ今我世ヘニ我ナラヤヘニ
天子ニアヒテモ我メヲワスレ給ナトヽ
朝日ヲ天子ニヒシ霜ヲ我カニヒシテ

はんたにたかはすはとこの弁の御もとにもせめ
給ふ九月にもなりぬはつしもむすほゝれえんなる
あしたに例のとり〳〵なる御うしろみとものひきしのひつゝもて
まいりて御ふみともみ給ふこともなくて
よみきこゆるはかりをきゝ給ふ大将殿のにはなをたのみ
こしもすきゆく空のけしきこそ心つくしに
かすならはいとひもやせまし長月に
いのちをかくるほとそはかなき月たゝはとある
さためをいとよくきゝ給ふなめり兵部卿宮は
いふかひなき世はきこえんかたなきを
朝日さすひかりをみても玉さゝのはわけの霜を

サノ歌ニ付タルハシ サトナクテモ霊ノ玉 母ヲモタセテ手ナリ 已云歌ノ文ト蛍ノ文ト 行合タルト有 但蛍ノ 文ハ歌ノ似合タルト云 コトカ

くさばもあらなん思ひしたゞりきこえいなくさむ
うきもわかぬべくなんとぞゆるしけたるきこえ
螢乃宮もおとゞばもて遊いまほ清使さんへきうち
おひさほや式部卿乃宮の兵衛督はとのゝ上北の清

式部卿トイウハ 紫ノ上ノ兄也 式部卿ノ長男 三ノ中納言源ヘシタシクム兵衛督玉ノイヲモヨノシテ ケサウダナ後トシ為ニ初テ手ヒス

いうかうかしきこえまいりわなどし給ふ思ひ給ふ
そのほかいとよく物のはなやかもまていふしくぞ

義孝集 ワスレスラカノ ワスルレドワスラレズイカ サニシテイカサニセン 西白キ事ヽ取リテ

思ひ侘りるゝいひもおほくらし見給ぐさそ
まばまなんと思ふも物のうれしきにいりのはま
ふしそいりの言伝ふきんがひのさすゝほよ志めたる
ふほひも言伝くなかにも人もうれおかしたくぬ
為りめふこうきうしぐふきけまなどいふ宮の清遊里

葵ハ日ニムカヒテハラカ ミムケテ根ヲカクス物 ナリ 向日 白氏ニ頭心 カラウシムニタトヘタリ 朝日サスト蛍ノ ウタ心モテトセ 玉モンニカセニハ不成トシ

なぞいうぐおもがれらんたゞいきしのみぞ
んもて白駒ありむりふおふひぶりの給さよく霊識
そのまやすけつとか北りあるといとめづらしと
見給ふ小みゆうゝい君をきわぬべき清くしほなりけ
たまへまば霊識ばりわ給ふ歌うれしうわりわ
か歌うりあとふけまどほましくなる人ゝ乃清侘
ごともおほりわ女乃御んなんいまのきゝをなん
かんありはくべき物をとたちさゝめきそうえ給ひ
くゝわとゝや

此ホトノ手本ニハ紫上 玉モスベキト源内ノ 仰ラルヽトシ 花ニ云玉ノムニ蛍ヲ 二スベキト思召ラント 内源ノノタマフト注セ トリイカヾト